【選択】日本史研究の最前線

◆期日　令和２年８月 17 日（月）~8 月 19 日（水）
◆主な対象　中学校・高等学校地歴科教諭
◆定員　40 名
◆会場　渋谷キャンパス
◆応募期間（仮申込）　令和２年４月 16 日（木）10:00 ~4 月 20 日（月）23:59
◆受講料　２万円
◆時間数　18 時間　【選択領域】受講者が任意に選択して受講する領域
◆講習内容

現在の日本史学界では、どのようなことが問題とされ、いかなる解決策が提示されているのでしょうか。本講習では、日本史（古代史・中世史・近世史・近現代史）のみならず、隣接する考古学や外国史（中国史）の講座も用意し、教科書の内容に即して、多角的な視点から日本史研究の最新の動向を紹介します。また講習にあたっては、考え（学説）の根拠となる史資料（文献史料・考古資料など）の扱いにも留意します。

◆担当講師

青木　敬　　國學院大學文学部教授
佐藤　長門　　國學院大學文学部教授
矢部　健太郎　國學院大學文学部教授
根岸　茂夫　　國學院大學文学部教授
樋口　秀実　　國學院大學文学部教授
手塚　雄太　　國學院大學文学部准教授

◆シラバス

講義名	国家形成と王権―古墳時代・古代の考古学―
担当講師	青木　敬
講義概要	古代以前の歴史を紐解く上で、六国史をはじめとする歴史書の存在はきわめて重要である。しかしこれら正史の記述は、天皇（大王）と近臣者の歴史に重点が置かれ、これだけで当時の政治や社会を十全に復元することは難しい。無論、各地の動向やその他多くの名もなき人びとの実態に迫るのは困難である。そこで重要な資料となるのが遺跡の発掘調査などを通して得られる考古資料である。 この講義では、古墳や古代都城、そして各地に設置された官衙（役所）や寺院などにおける近年の発掘調査成果を紹介しながら、古墳時代から古代という国家形成期の政治や社会を復元する方策を提示し、あわせて権力の中枢たる王権が確立していった過程をたどってみることにしたい。 授業の内容 （1）講義「古墳と倭王権」 （2）講義「古代の官衙・寺院と都城」
評価方法	講義の最後 15～20 分で確認テストを実施します。

講義名	古代の権力構造－天皇と氏族の相克－

担当講師	佐藤　長門
講義概要	戦前・戦中教育の反省から、戦後の日本史教育では天皇（大王）を極力排除し、氏族中心の歴史叙述がおこなわれてきました。その傾向はいまでもほとんど変わっていませんが、好むと好まざるとにかかわらず、専制君主制をとっていた古代日本において、天皇の存在を無視することは歴史事実を歪めてしまうことになりかねません。本講座では以上の観点にもとづき、日本古代の権力構造について史料に即したニュートラルな立場（実証史学）から検討してみたいと思います。その際、時間的な制約もありますので、論点を下記の３つにしぼり、それぞれ最新の研究動向を紹介していきます。 ⅰ）蘇我氏は王権簒奪をねらったのか　－崇仏論争と乙巳の変－ ⅱ）女帝は単なる“お飾り”だったのか　－中継ぎ論と非中継ぎ論－ ⅲ）摂政・関白はいかに成立したのか　－幼帝の出現と格殺事件－
評価方法	講義の最後 15～20 分で、確認テストをおこないます。

講義名	史料で読み解く中近世移行期
担当講師	矢部　健太郎
講義概要	日本史の教科書では、一般的に戦国時代までを中世、信長・秀吉の織豊期からを近世としていますが、國學院大學では江戸時代を近世史ととらえています。中近世移行期としての豊臣期に注目し、従来の研究動向や問題点を把握しつつ、豊臣政権に関する最新の研究状況について考えてみたいと思います。 （1）豊臣政権の大名支配―「五大老」とは何か― 豊臣政権については、新たな論点が多数提出されています。果たして秀吉はどのような政権構想をもっていたのか、それはなぜ破綻したのか。いわゆる急場しのぎの「五大老」制創出という説明の妥当性について、一次史料に基づき検証します。 （2）豊臣政権末期の状勢と「秀次事件」 秀吉の大名支配秩序は、晩年の「秀次事件」を画期に大きく動揺します。この重大事件は、十分な検討もないまま「耄碌した秀吉が秀次を切腹させた」と説明されてきました。関白世襲という途を選んだ豊臣宗家の自己否定にも見えるこの事件について再検討を試みます。
評価方法	講義の最後 15～20 分で確認テストを行います。

講義名	近世の平和と社会
担当講師	根岸　茂夫
講義概要	日本近世社会の特徴として、政治・経済・外交・文化など多様な問題点が指摘できますが、とりわけ重要なことは、平和な社会であったこと、庶民が実力をつけ日本史上初めての庶民文化が形成されたことが挙げられます。とくに庶民文化の形成の背景として、彼らが識字能力を獲得していく過程は、教育や人々の知識の獲得が社会を発展させていったと子供たちに気づかせる事例であり、教育現場で強調されるべきでしょう。近世の政治は、そのような近世社会とりわけ庶民の動向に対応を迫られていました。さらに、環境問題を考える上でも、近世社会はさまざまな提起をしてくれます。かかる問題を史料からどのよ

	うに探っていくのか、また研究の現場ではどのように理解されているのかを、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。なお、現物の江戸時代の古文書などに触れる機会も作るつもりです。 1）戦乱のなかの庶民と平和への願い 2）生類憐みの令と自然環境 3）目安箱は誰のためのものか
評価方法	講義の最後 15 分～20 分程度で確認テストを行います。

講義名	日中・日韓関係史研究の現状と課題
担当講師	樋口　秀実
講義概要	すでにニュース等で報じられている通り、2022 年から実施される新たな学習指導要領では、現在の「世界史Ａ」と「日本史Ａ」を融合した新科目である「歴史総合」が新設される予定です。また、こうした未来の出来事を待たずとも、近年の世界史教科書は、かつてのものに比べ、日本の動きに関する記述が増えました。現在は、歴史を学習するうえで、世界史のなかの出来事と日本史のなかの出来事とを重ね合わせて考察する能力が求められています。世界史の潮流に日本はどのように対応したのかを考察する能力を養うことは、いわゆるグローバル社会のなかで活躍する日本人を育成することにつながりましょう。また、近年の「観光立国」をめざす動きのなかで、世界にむけて日本の歴史・伝統・文化を発信かつ伝達することは、非常に重要な要素となりましょう。 そうしたなか、国際社会との関わりが一段と濃密になったのが、近代以降の日本です。専門的な歴史研究においても、近代日本における歴史的事象は、「世界史のなかの〇〇」として分析されるケースが多いです。さらに、近年の日本外交史研究の傾向として、日本語の史料のみならず、外国語の史料も渉猟し、多角的に分析した成果が相次いでいることもあげられます。これは、日本人が海外に行く機会が多くなったこと、外国、とくにアジア諸国の史料公開状況がよくなったことに起因しています。その結果、日中戦争やアジア・太平洋戦争の開戦原因究明を最重要視する従来の視点に束縛されない、多角的視点からの「世界史のなかの日本史」像が生まれてきています。 この講義では、以上のような新たな研究傾向を踏まえ、従来の歴史像からの修正が大きくなった韓国併合と辛亥革命という、日本とのかかわりが深い２つの国際的事件をとりあげ、近年の研究成果を詳しく説明していきたいと思います。この２つの事件は、それぞれの事件が起こってから１００年以上が経過し、その百周年を記念して、2010 年代に日本を含めた世界各地で国際記念シンポジウムが開かれ、論文集などの刊行も相次ぎ、飛躍的に研究が進展しました。そうした新しい研究成果を、日本とのかかわりを踏まえながら、この講義で紹介していくつもりです。
評価方法	講義の最後 15 分～20 分程度で確認テストを行います

講義名	戦前日本の政党政治
担当講師	手塚　雄太
講義概要	1990 年代以降の政治制度改革により、日本の政党政治は政治主導・官邸主導へと舵を切りました。そのことの是非は置いておくとして、こうした現代政党政治の源流は、戦前日本の政党政治にあります。戦前の政党政治では、政党名が頻繁にかわり、多くの政治家が

	登場するため、人名と政党名を結びつけて暗記するだけの学生も少なくないようです。しかし、それでは戦前の政党政治の可能性と限界の所在はわかりません。 　そこで本講義では、近年の最新の研究を踏まえたうえで、戦前日本の政党政治について論じます。とはいえ、その範囲は極めて広範であるため、概ね下記のような内容で講義を進めていきます。 （1）戦前期二大政党政治の源流 （2）戦前期二大政党政治の模索 （3）大政翼賛会と戦時期の議会政治
評価方法	講義の最後 15～20 分で確認テストを行います。